

『春日左抛御前法楽独吟百韻』の伝来

——報告と考察——

伊藤伸江・奥田 勲

—

宗祇の句集『宇良葉』の末尾には、三つの独吟百韻がおさめられている。そのうち、最初の百韻である「春日左抛御前法楽独吟百韻」は、発句「朝なけにさしそふ春のひかりかな」が「將軍家の御会にまいるへきよし侍しとき、春日左抛明神に立願したてまつるとて」との詞書で、発句の部にもおさめられているが、百韻自体の末尾にも、次のような説明の添書が付されている。¹⁾(これ以降、添書を便宜上奥書と称し、論の展開のために、この奥書を「奥書A」と称する。)

【奥書A】

此百韻は將軍家の御会にはしめて

めしくはへられ侍し時^{春秋}_{五十六歳}春日の

末社左抛の御前に祈念の事

ありて彼御社の名を発句の中に

かくして手向侍しを程へて後

独吟の功を三時に終侍しもおほよそ

この神にいのり申事いさゝかその
よしある事になん

この奥書によって、宗祇は、將軍家の連歌会に参加がなかつた文明八年、五十六歳の時に、しかるべき理由があつて春日末社左抛社に祈念し、発句を詠み捧げたこと、その後独吟で速詠の形で付け終えた百韻であることがわかる。

この百韻自体の独立した伝本は多くはないが、奥書Aと同一系統の奥書のある独立した百韻の伝本として、管見に入る限りでは、富山市立図書館山田孝雄文庫蔵『宗祇時代連歌集』（目録番号5527、目録によれば江戸初期から江戸中期の写）所収「春日左抛御前法楽 独吟²⁾」がある。

その他、末尾に奥書を持つ伝本には、北海学園北駕文庫本『連歌独吟百韻外』所収「文明八年四月十一日春日左抛法楽宗祇独吟百韻」（16―28―16―2、D613、写一冊、1000002643、書写年代不明、江戸時代後期か）、大阪天満宮蔵『古連歌千四百』（れ甲6）所収本（延宗本・文化六年三月写）の同百韻がある。

後二者のうち、北駕文庫本『連歌独吟百韻外』は、後述するように、この百韻と「明応八年宗祇独吟何人百韻」（発句「かぎりさへ似たる花なき桜かな」とを、連続して書写し、その間に、両百韻が一具のものとして伝えられたことを記す記述（「かぎりさへ似たる花なきさくら哉 此百員ト合巻也」と、両百韻に言及する奥書とを置いている（三に引用）。大阪天満宮蔵延宗本の末尾の奥書は、北駕文庫本の奥書の「春日左抛御前法楽独吟百韻」に関する部分をおそらくまとめ記したものと考えられ、『宇良葉』所収の「春日左抛御前法楽独吟百韻」の奥書（奥書A）とは形式や内容が相違している。

こうした伝本の存在からは、この百韻が、単独ではなく、「明応八年宗祇独吟何人百韻」と一具として、単独の伝本の場合とまた別の奥書を持ち、卷子の形で流布したという事実が確認できる。この点に関して報告し、どのように、またなぜそうした形も流布したのか、考えてみたい。

「春日左抛御前法楽独吟百韻」が、「明応八年宗祇独吟何人百韻」と一具のものとして伝来したらしいことについては、「明応八年宗祇独吟何人百韻」の研究側から、金子金治郎氏の言及がある。⁽⁴⁾ また、伊地知鐵男氏によっても、『連歌集書』第五十一冊の第一番目、第四番目に入る両百韻に関係する、野坂本等諸本の跋文紹介があった。⁽⁵⁾ ただ野坂本は現在閲覧不可能であり、ここは小松天満宮本から考察をすすめる。

石川県小松市の小松天満宮は、加賀前田家三代利常により、明暦三年（一六五七）に創建され、加賀藩の人々の崇敬を集めた神社であるが、ここに「春日社法楽何路百韻」（春日左抛御前法楽独吟百韻）と、「宗祇独吟何人百韻」が蔵せられている。現宮司北畠能房氏のおはからいにより、平成三十年四月十九日に拝見、調査をさせていただいた。

「春日社法楽何路百韻」は、昭和十九年十月新写の卷子本一卷。筆者は、梅林院九世秀順氏。秀順氏は現在の宮司北畠能房氏の曾祖父に当たる方である。外題は秀順氏筆で「宗祇独吟前百韻写」。唐花模様の緑布表紙。見返しは墨色と青色のまじった墨流し文様である。軸は白軸。抑え竹には茶色紐が付いている。第一紙には、「春日末社左抛明神御前法楽／何路」とあり、百韻が写されている。

卷子本の末尾には、「春日社法楽何路百韻」に付属する宗祇の奥書及び梅林院九世秀順氏の書写奥書がある。⁽⁶⁾ この宗祇の奥書は、奥書Aの系統であり、秀順氏が写された親本がいかなる人の所蔵になるものかは不明だが、奥書Aを持つ伝本であったことはわかる。

此百韻ハ將軍家門御会にはし

めて召加へられ侍し時春秋
五十六歳

春日の末社左抛の御前に

祈念の事ありて彼御社の名を
発句の中にかくして手向侍しを
程へて後独吟の功を三時に終はへ
りしなりおよそこの神にいのり
申事いさゝかそのよしあることに
なむ

この百韻ハ御社にある独吟の前の
ものにて御やしろには後の百韻
のみなりしをこたひさる人にこ
ひて前の百韻をうつしとりはし
めて前後二百韻揃へしものなり

昭和十九年十月写畢

梅林院九世

秀順

行年七十七歳

秀順氏の書写奥書によれば、「春日左抛御前法楽独吟百韻」は、前の百韻として、天満宮に存する後の百韻と一具とあるものなので、昭和十九年十月に「春日左抛御前法楽独吟百韻」をある人に借り受けて写し、両百韻を揃えたという。

次に、秀順氏が「春日左抛御前法楽独吟百韻」を写す契機となった、小松天満宮文庫本「宗祇独吟何人百韻」の

書誌を述べる。

卷子本一軸。「宗祇独吟連歌」と打ち付け書で記された桐箱入り。箱内に「連歌宗匠種玉庵宗祇 明応八年七月廿日／独吟百韻／かきりさへ 一卷 印」と記され、朝倉茂入の極め印が押された紙が同封されている。卷子本の表紙は流水紋のある朽葉色の布表紙。黒檀かと思われる黒軸。押さえ竹はあるが、紐は紛失して無い。見返しは金。第一紙56cm、第二紙54cm、第三紙55cm、第四紙54cm。料紙四枚を貼りつなぎ、その上に百韻を書いている。料紙には裏打ちあり。墨書された百韻の句のうちには、紙の継ぎ目にかかって記された句、句の末尾の文字が金泥の模様隠されている句がある。また、料紙同士の糊が剥がれている部分があり、張り込まれた内側の箇所には金線が無い。これらのことから、まず装飾なしの状態の料紙を貼り合わせ、当該の紙に百韻を写し、その上で、字の書いてある箇所を残して金泥で紙の周囲を装飾し、最後に百韻が記された箇所の周囲全体を金線で四角く囲んでいることがわかる。非常に高価な装飾をほどこしており、書写は江戸時代か。石川県指定有形文化財である。

内容は、何人百韻の句が書かれ、挙句「わか影なれやふくる灯」の次に改行し「百韻終」と記した後、跋文が記されている。

こちらの百韻の奥書の翻刻を以下に示す⁽⁷⁾(この奥書の各行頭に番号を私に付し、①から⑤までの部分を奥書Bの1、⑥から⑩までの部分を奥書Bの2と称する)。

【奥書B】

(一 行前に「百韻終」とある)

- ① 此独吟二百韻之内前ハ予五
- ② 十六之時將軍家御会ニ始而被召
- ③ 加侍し時祈念のためニ春日末社
- ④ 左抛御前発句を手向侍りき取

⑤分此神二申事子細ある事とそ

⑥後の百韻ハ予今年七十九歳

⑦三月廿日比ニ落花の面白ニ不堪

⑧して云捨侍しを其後一句二句なと

⑨付侍てみれば更に心もほれ言葉もむす

⑩ほふれて侍なから只にはと思ふ心許にて

⑪文月の末に極してはたしぬ

「極して」は野坂本では「からうして」。

⑫老の思の其事となきハ自元さる

⑬事なれともまへの三時つかふまつりし

⑭心をおもへは遙の利鈍侍へきにや

⑮先の百韻も其内二句三句もよろ

⑯しきは侍らねとも猶形も有様にや

⑰侍らむいつれもかひなき諺なれと申に

⑱是を便として此道を長く思留りぬ

⑲へくこそ

⑳ 明応八年ひつしのとし

㉑ 七月廿日

卷子本には、「後の百韻」にあたる何人百韻しかないが、前・後と呼び分けられた二つの独吟百韻に対しての奥書である。「後の百韻」に関し、明応八年の七月廿日の日付があり、三月廿日ころの詠みはじめから四ヶ月の時をかけたことを示している。

「明応八年宗祇独吟何人百韻」の伝本の中で、小松天満宮本と類似の奥書を持つ伝本に、京大頼原文庫本（Gi19）と天理図書館本（れ・4・1-26）がある（注（8）に頼原文庫本の翻刻をあげた）。頼原文庫本は平成三十年五月二十三日、天理図書館本は平成三十年九月三十日に閲覧、調査をなした。

頼原文庫本は、昭和二年十二月十八日に頼原退蔵氏が原稿用紙に書写した草稿を、後に袋綴冊子本の形式に仕立てたものである。京大で所蔵するにあたり袋綴冊子本の形に仕立てたかと思われる。百韻末尾に跋文を付し、その内容はほぼ小松天満宮本に一致し、「明応八年ひつしのとし／七月廿日」の日付も入るが、④「手向」を「手問」（以下、順に小松天満宮本、頼原文庫本）、⑩「心許」を「心躰」、⑫「自元」を「ひえ」、⑬「三時」を「上時」とするなど、本文には問題が多い。なお、頼原氏の書写奥書は、「右真如堂塔頭某院蔵什卷物より写校了宗祇自筆にはあらざるべし／昭和二年十二月十八日／退蔵」とあり、氏が真如堂塔頭所蔵の卷子本を写したことがわかる。天理本は、原稿用紙にペンで筆写した「明応八年宗祇独吟何人百韻」をこよりにより仮綴じた本。紫影文庫の朱印を持ち、昭和二十六年二月五日に天理図書館の蔵となつている。奥書（朱）は「右真如堂塔頭某院蔵什卷物より写一校了／昭和二年十二月十八日 紫影」とあり、頼原氏書写と同一本を、同じ日に藤井乙男氏が写したものである。『綿屋文庫連歌俳諧書目録第一』には、「奥書 右真如堂塔頭某院什卷物より写一校了 昭和二年十二月十八日 紫影」とあり、「真如堂」を「真如蔵」と誤り、さらに一文字抜けているゆえ、注意が必要である。いずれも新写本であるが、親本として、小松天満宮本と同形式である（後の百韻と奥書を有する）真如堂塔頭蔵卷子本の存在がわかる。

真如堂（鈴聲山真正極楽寺）は、京都市左京区浄土寺真如町82に存する天台宗寺院である。永観二年（九八四）開創とされる古刹であり、二度の焼失を経て、元禄六年に現在の地に移転し、元禄から宝永年間にかけて中門、伽藍などの

建設がなされ現在に至る。穎原文庫本は、穎原氏が写した年次のわかる新写本としては最も早い昭和二年のものである⁹⁾のだが、他に情報がなく、また現段階では、藤井・穎原氏の写した真如堂塔頭蔵本に關しては未調査である。

さらに、大阪天満宮『古連歌千四百』(れ甲6)には、「明応八年宗祇独吟何人百韻」も収められている。「明応八年宗祇独吟何人百韻」(名称は「明応八年三月/唐何(朱)」となっている)は、八番目、「春日左抛御前法楽独吟百韻」は十四番目に入り、連続してはいない。「明応八年宗祇独吟何人百韻」の延宗本は、奥書にあたる部分を百韻冒頭余白に注として小字でびつしりと書き入れている。即ち、校合した他本からの書き入れであるが、「祇公自筆の巻物^{ニ百韻}の奥ニ此百韻ハ予今年七十九歳/三月廿日比^ニ落花の面白^ニ不堪して云捨侍しを其後一句/二句なと付侍て見れハ更ニ心もほれ言葉もむすほゝれて侍/なから只にはと思ふ心躰にて文月の末ニ至りてはたしぬ/老の思ひの其事となきハ^{ナマ}わえさる事なれともまへの上/時つかふまつりし心を思へハ遥の利陀侍るへきにや先の百員/も其内二句三句も宜しきハ侍らねとも猶形も有程にや/侍らんいつれもかひなき諺なれと申ニ是を便として此/道を長く思留りぬへくこそ 明応八年ひつしのとし七月廿日トアリ」と書かれている。小松天満宮本の奥書Bの2を書き入れた形であり、校異の主なものもは類原文庫本と一致する。

また、百韻末尾に本文と同筆、同じ字くばりて、「此百韻ハ祇公七十九歳三月より七月まで五ヶ月の程門弟遣戒の為に首尾ともに安く/とつゝけ給ひし也末代の龜鑑此みちの正風体なるへし」と墨書している。すなわち、この部分は、本文書写時に同時に書き、後に、校合本からの書き入れを冒頭余白に加えたと考えられる。校合に際して真如堂塔頭蔵本の系統の卷子本を見る事ができたのであろう。

一方、これら「宗祇独吟何人百韻」に付随する形での跋文に対して、北海学園大学北駕文庫蔵『連歌独吟百韻』(小63)は、八つの独吟を時代順に集めた独吟百韻の写本であるが、うち二番目と三番目の百韻として、「文明八年四月十一日春日左抛法楽宗祇独吟百韻」、「明応^{編者註マデ}三年三月宗祇独吟百韻」が連続しており、二つの百韻の間には次のような記述がある¹⁰⁾。

(左抛百韻の挙句「猶手向をけ露のことは」の後に)

かきりさへ似たる花なきさくら哉 此百員ト合巻也

奥書三云

此独吟二百韻の内予^(竊者注マテ)五十二歳の時將軍家の御会ニ始而

被召出侍しニ祈念の為春日の末社左抛御前にして発句を

手向侍りき取分此神に申事子細有こと、その後百員は

予ことし七十九歳三月廿日ちる花の面白に堪すしていひ捨

侍りしを其後一句二句なと付侍りてみれば更に心も

ほれ詞もむすほ、れ何のことほりもなく侍りしを

おもひ捨す月くをおくり侍なからしかもやむことを

得すしてなかは過ぬれはいかてか只にはとおもふ心斗にて

文月の末にからうしてはたしぬ老の思ひのそのこと、

なきはもとよりさることなれと前の三時につかふまつりし

心をおもへははるかか利鈍侍るへきにやさぎの百員も

その内二句三句もよろしきは侍らねと猶形もよき程

にや侍らん中くこれを便として此道をおもひとまる

へくこそ

こうした両百韻の間に奥書などを置く記述の配置は、合巻で存した両百韻の、「宗祇独吟何人百韻」の奥書が、左抛百韻の内容にも言及しているからと考えられる。

さらに、北駕文庫本の奥書は、奥書Bの系統に属するが、前の百韻詠出時の年齢、後百韻の奥書Bの2部分での傍線

部（稿者）のような相違が小松天満宮本との間に存している。

先に述べた野坂本『春のひかり』所収百韻の跋文は、金子氏、伊地知氏のそれぞれの翻刻（完全ではなく一部分のみ）があり、^①それによれば、小松天満宮本にある末尾日付は野坂本にはない。また、^⑦「三月廿日比二」が「三月廿日比」、^⑩「侍なから」が「何の理もなく侍しを、おもひ捨ず月を送り侍ながら、しかもやむ事を得ずして半過ぎぬれば、いかに」、^⑬「なれとも」が「なれど」、^⑬「三時」が「三時に」、^⑬「諺なれと申に」が「ことわざなれど、中く」、^⑬「として」が「にして」、^⑬「長く」が「ふかく」、^⑬「留りぬ」が「とまる」、^⑬「へくこそ」が「べきとこそ」となっており（番号は小松天満宮本の翻刻の行数）、北駕文庫本が野坂本系統であることも判明する。

以上の奥書の検討から、「春日左抛御前法楽独吟百韻」「明応八年宗祇独吟何人百韻」を合わせ持ち、奥書Bを記す卷子本に、小松天満宮本「明応八年宗祇独吟何人百韻」が写した卷子本系統（真如堂蔵本、延宗本の校合本が属する）、北駕文庫本や野坂本が写した卷子本系統の二系統が少なくとも存したと考えられよう。小松天満宮本は、延宗本の存在から、天満宮関係の書の流れが思われる。

なお、「明応八年宗祇独吟何人百韻」は、名作の誉れ高いゆえに、注が付された形で多く流布しているが（金子氏分類^⑫によれば、第一種注（宗牧注）、第二種注（周桂注）、第三種注（『連歌破邪頭正・追加』）、付注百韻の場合は、左抛百韻との関連は見られない）。

四

小松天満宮本「明応八年宗祇独吟何人百韻」は、どのようにして天満宮に蔵されたのであろうか。

小松天満宮初代別当の能順は、貞享二年（一六八五）年六月七日に、小松天満宮の由来を問われ、寺社奉行にあて執筆した由来書と宝物目録を提出している^⑬。この目録は、微妙院前田利常より拝領した品々の目録で、「古筆之物共」と

して、歌書類と、連歌関係書が多くあり、中で連歌懐紙は次のようなものが存した。

一 連歌懐紙	近衛殿竜山御筆	壹卷
一同	正親町公躬卿筆	百韻不足
一同	速水左衛門尉友益筆	百韻不足
一同	連歌師 専順筆	百韻
一同	同 紹巴筆	百韻
一同	同筆	百韻不足
一同	等専筆	百韻
一同	同 昌叱筆	百韻不足
一同	同 理成筆	百韻不足
一同	同 玄仍筆	百韻不足
一 宗砌連歌	同 行助筆	百韻
一 夢想連歌	同 萩野宗現筆	百韻

小松天満宮本の「明応八年宗祇独吟何人百韻」の朝倉茂入極めは、宗祇自筆としているが、目録中に宗祇の作品、宗祇の筆跡とされるものは見当たらない。

一方、年次不明であるが、二度にわたり梅林院の宝物目録の手控えを記したと思われる『小松梅林院天満宮宝物之記』（薄様一枚）¹⁴が、加越能文庫に存している。宝物の項目中に謙徳院（前田重熙、一七二九〜一七五三）の自筆百首があり、この百首の奉納以後の手控えと知られ、江戸中期以降のものであろうか。その前半部に、次のように記されている。

…

靈元天皇ヨリ拝領

一 梅花硯

正三位藤原韶光卿御筆

一同記

一 小松天満宮御縁起 本多素柳軒遺筆

聖武天皇御筆

一金天品第廿三

一 利長公御書

謙徳院様御自詠御自筆

一 松梅題詠百首

一 独吟連歌百韻 宗祇筆

仙洞様御筆

一 立像人丸

：

能順が元禄十三年に靈元院から拝領した梅花硯とその記、能順の依頼により本多政長（一六三二〜一七〇八）が記した『小松天満宮縁起』、また筆跡類に「独吟連歌百韻 宗祇筆」があり、これは、「明応八年宗祇独吟何人百韻」と考えてよいと思われる。貴顕や権者の筆跡と記される天神像、名号、経などの中に混じり、宗祇自筆百韻が書き止められるが、他の連歌書類はない。

宗祇の筆跡は江戸期において珍重され、例えば『江岑宗左茶書』によれば、正保三年（一六四六）三月廿日、石川宗玄が亭主であった茶会で、「宗祇ノ文」が掛物であり、明暦元年（一六五五）五月三日の万や宗伴が亭主であった茶会

で、「心溪ノ筆」⁽¹⁵⁾「宗祇 御セウ」⁽¹⁶⁾が掛物となっている。宗祇の筆跡が北野梅松院関係の文書から抜き取られ、表装されたことも明らかにされており、北野天満宮関係者は、当然宗祇筆跡を尊重しよう。『聯玉集』⁽¹⁷⁾を見ても、「祇公筆跡開」の発句が五例見え、能順が折々諸所の宗祇関係古筆披露の連歌会に関わったことが知られる。

「明応八年宗祇独吟何人百韻」に関して、小松天満宮において、初代別当をつとめた能順が関係するかもしれないと見える記述が、桂井未翁「能順遺愛の連歌文書」(「連歌と俳諧」第二巻第三号・一九三七)に見える。桂井氏が、昭和十二年三月十九日に、小松天満宮の連歌書に関して閲覧調査の機会を得た際の記録として、「かきりさへ」百韻の奥書に関して、「幸にも元禄十一年五月四日修竹齋行年七十一能順、として後記だけを写したものがでた」と記述されている。しかし、記述だけでは、どのような文書であるかが不明であり、また平成三十一年二月二十二日の綿拔豊昭氏の小松天満宮調査に際して問い合わせたが、この後記を写した文書はないとのことであり、稿者も未確認、未見である。

ただ、元禄十一年の能順は、『北野天満宮資料(宮仕記録)⁽¹⁸⁾』によれば、前年四月に加賀小松に下向、十二月十二日に上京し、北野にて年預代をつとめている。この年八月五日には、宗祇絵像(興善院法印良勝筆)を宗祇二百年忌千句連歌興行のために北野学堂に寄進している。また、小松天満宮には「元禄十一年宗祇忌懐旧百韻」(能順筆)が存在する。元禄十一年は、能順がきたるべき宗祇二百年忌を期して動いた様子のみられる年であった。推定ではあるが、能順と関わる形で、「明応八年宗祇独吟何人百韻」の卷子本が小松天満宮におさめられたとみても不思議はないだろう。

『聯玉集』によれば、能順は、七十九歳時に、小松で

老後七十九、七月廿九日歛生方へ罷て祇公独吟の発句、かきりさへ似たる花なき桜哉、此句をおもひ出て忌日なれば手向侍る

220 言の葉の花には似たるはなもなし

と、宗祇忌日に、「明応八年宗祇独吟何人百韻」の発句を思い、宗祇と同年となった自身の老境と思いあわせて、あらためて宗祇追慕の手向けの句を詠んでいた。能順の宗祇追慕に関しては、別に一稿をなすが、能順が小松天満宮本「明

応八年宗祇独吟何人百韻」の存在に関わる可能性があるように思われる。

五

『宇良葉』所収「春日左抛御前法衆独吟百韻」奥書はすでに、三時（約六時間）で詠み終えたという点で、この百韻が速詠であったことを示している。⁽¹⁹⁾大阪天満宮文庫の延宗本の左抛百韻は、「有本二春日末社左抛大明神三時百員トアリ」と冒頭に朱で書き加えており、速詠であることに関心が向けられていたことがわかる。それに対して、「明応八年宗祇独吟何人百韻」の方は三月廿日から、奥書の日付の七月廿日まで作成に四ヶ月の時間をかけている。奥書では、前に速詠した時よりも、今回の何人百韻にははるかに鋭い点も鈍い点もあるだろうと両者を比較し、しかし左抛百韻もなるとか形になっていると評価する。二つの百韻を合わせ、今後の修行の糧にすべしというのは、両百韻に、速詠と熟考の後の詠という性格の違いがあり、それぞれの句を味わうことが稽古のためには必要との判断であろう。奥書Bを見ても、多様な詠みぶりを学習させることで、門弟たちの研鑽を意図しており、付け方を学びたい弟子たちの要望に応じて作られているよう。

しかし、『宇良葉』末尾の三百韻には、「明応八年宗祇独吟何人百韻」は収められていない。『宇良葉』の成立は明応九年秋、七月の越後下向以前であろうと考えられ、宗祇自身が、末尾におさめる百韻として選んだのは、「春日左抛御前法衆独吟百韻」、延徳二年の「夢想之連歌」、明応五年の「本式連歌」の三作品であった。

『宇良葉』の「春日左抛御前法衆独吟百韻」の春日社左抛明神への祈念が意識された発句や奥書、「夢想之連歌」の連歌の神（住吉明神）との交感と見える発句や、序からは、連歌道をすすむ宗祇に対する神からの加護への思いと、宗祇自身の連歌道へのさらなる精進の決意がうかがわれる。文明八年は將軍家御会への初参加があり、「夢想之連歌」の発句を得た延徳元年冬は、十二月に幕府に任命された北野連歌会所奉行を辞し、この連歌を完成した延徳二年九月には、

後御土御門天皇・三条西実隆両吟百韻連歌の合点の勅命がある。「一介の連歌師に天皇の重用が及んだ最初の事例」とみえ、⁽²⁰⁾両百韻は、幕府、天皇へとつながっていく自らの人生の社会的成功をたどる際に記念碑となるものである。さらに「本式連歌」をなしたのは明応五年一月九日であるが、この前年に『新撰菟玖波集』を編纂し、作者部類を一月四日に禁裏に進上し終えたばかりであり、この日には、自作連歌に関して勅点を蒙るべく三条西実隆に依頼しており、閏二月十一日には下賜された。以上から、宗祇の連歌の道における成功の歩みと到達点を意識させる百韻を選択する、そのような意識があることが考えられる。内容も速詠と完成までに一年近くかかった詠、『連歌本式』に従う詠と詠み方を変えている。発句集である『宇良葉』に、独吟三百韻も加えた形で、宗祇が、自らの力量を能う限り総合的、包括的に披瀝したと見られよう。

すなわち、「春日左抛御前法楽独吟百韻」の伝来形態からうかがえるのは、宗祇自身による、はつきりした百韻の選択と意識的な発信であろう。百韻の伝播の様相からは、享受者の要求に応じた一形態の広がりが見えてくる。しかし、『宇良葉』の末尾に三百韻を付載するというあり方は、奥書A・Bの差異に見られるように、自己の連歌道への思いと強く関わる宗祇側の選択意識の存在を思わせる。『宇良葉』の三百韻それぞれに関しての、成立・伝来状況などの追跡をなし考察をなす必要があろう。

なお、能順は、高岡の商人服部氏（高岡の本陣）と交際があつたが、服部氏の親戚であり隣の家でもあつた清水家に、宇良葉の一写本が伝わっている。『宇良葉』は、著名な宗祇の句集にもかかわらず、現存伝本が非常に少なく、尊経閣文庫旧蔵の櫻井本と、清水家旧蔵の高岡市立中央図書館本のみである。こうした『宇良葉』の伝来状況も、享受の観点からその一因が考えうるのであろうと思われ、宗祇の創作意識への接近に利するための、能順の宗祇連歌の受容の解明も求められよう。

本論考は伊藤が作成し、奥田との検討会議にて検討した。また、本論考はJSPS 科研費 JPI7K02421 「独吟百韻分析に

よる宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。

注

(1) 『宇良葉』の引用は、国文学研究資料館の櫻井本のマイクロフィルムによる。

(2) 山田文庫本の奥書は次の通りである。

此百韻ハ將軍家の御会にはしめて加られ

侍し時^{春秋}五十六歳 春日の末社左抛の御前に

祈念ノ事ありて彼御社名を発句の中に

かくして手向侍しを程へて後独吟の劫を

三時に終え侍しもおほよそこの神にいのり申

事いさゝかそのよし有ことになん

(3) 『古連歌千四百』所収本の奥書は次の通り。

祇翁自筆巻物ノ奥ニ

予五十六の時 將軍家御会ニ始而

被召加侍りし時祈念のために春日

末社左抛御前発句を手向侍りき

取分此神申事子細あるとぞ

トアリ

この奥書の内容部分は、北駕文庫本や、後述小松天満宮本「宗祇独吟何人百韻」末尾の奥書の前半の形式に近く、山田文庫本とは別系統である。

(4) 日本古典文学全集『連歌俳諧集』（昭和四八・小学館）の「宗祇独吟何人百韻」の作品解説に言及があり、『宗祇名作百韻注釈』（昭和六〇・桜楓社）において作品解説を改訂版とし、新編日本古典文学全集『連歌集 俳諧集』（二〇〇一・小学館）にも改訂版が使われた。

(5) 伊地知鐵男編『連歌百韻集』(昭和五〇・汲古書院) 解題。

(6) 引用は小松天満宮蔵本による。

(7) 引用は注(6)に同じ。

(8) 頼原文庫本奥書は次の通りである。

百韻終

此独吟二百韻之内前は予五

十六之時將軍家御会々始而

被召加侍し時祈念のためニ春日

末社左抛御前発句を手問侍りき

取分此神申事子細ある事とぞ

後の百韻は予今年七十九歳

三月廿日比ニ落花の面白ニ不堪

して云捨侍しも其後一句二句など

付侍てみれば更ニ心もほれ言葉も

むすほふれて侍なから只にはと思ふ

心躰にて文月の末に□□てはたしぬ

老の思の其事となきはひえさる

事なれともまへの上時つかふまつりし

心をおもへは遥の利鈍侍へきにや

先の百韻も其内二句三句もよろ

しきは侍らねとも□^(類方)形も有様に

侍らむいづれもかひなき諺なれや

と中々是を使として此道も

一八〇

一八ウ

長く思留^{しりぞ}るぬへくこそ

明應八年ひつしのとし

七月廿日

一九オ

右真如堂塔頭某院藏什巻物

より写校了 宗祇自筆にはあらざるべし

昭和二年十二月十八日

退藏

一九ウ

(9) 母利司朗「頼原文庫の新写本」(『国語国文』第八十九卷第一号・令和二年一月)

(10) 引用は国文学研究資料館マイクロフィルムによる。

(11) 注(4)の金子氏の論、また注(5)伊地知氏編『連歌百韻集』(昭和五〇・汲古書院)解説中に記述されている。

(12) 注(4)金子氏論に分類されている。

(13) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫『寺社由来』(16.61-426)による。また、『加越能寺社由来上巻』(昭和四九・石川県図書館協会)に翻刻があるが、閲覧により、翻刻を訂正した部分がある。

(14) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫『小松梅林院天満宮宝物之記』(16.61-129)による。

(15) 引用は『江岑宗左茶書』(平成一〇・主婦の友社)による。

(16) 末柄豊「宗祇書状の伝来に関する一考察―蒐集文書と紙背文書―」(『室町時代研究』第一号・二〇〇二)

(17) 引用は『連歌大観三』による。

(18) 引用は『北野天満宮資料 宮仕記録続二』(平成九・北野天満宮)による。

(19) 三時は、約六時間。連歌作品の詠出時間の表記を見ていくと、例えば後に宗長の享祿四年十一月二十五日夢想独吟「明ぼの」では、「五時」のうちに詠んでいる。

(20) 両角倉一「連歌師宗祇の伝記的研究」(平成二九・勉誠出版)

(21) 綿拔豊昭「近世越中 和歌・連歌作者とその周辺」(平成一〇・桂書房)。また伊藤伸江・奥田勲「高岡市立中央図書館本『宇良葉』の研究と翻刻」(『愛知県立大学説林』(第67号・平成三十一・三))

貴重な史料の閲覧や翻刻掲載を許可してくださった、小松天満宮・大阪天満宮・富山市立中央図書館・金沢市立玉川図書館近世史料館・京大文学部図書館・天理図書館に感謝申し上げます。